

きょうつか ろくじぞう  
経塚の六地藏  
(森岡)

もりおか きょうつか  
森岡に経塚とよぶ共同墓地がありました。

そこに二組の六地藏が、前と後ろに並んで立っていました。前の六地藏が古いほうで、後ろの舟形光背の六地藏が後から建てられたものでした。

むかし、まだ古いほうの六地藏しかなかったころのことです。あるとき、村の若者が集まっているところの議論しあっているうちに、その六地藏をそまつに扱おうとたたきがあるということ

わだいにのぼりました。すると、

「この世の中にたたきなんかあらずか。そんな

ものは迷信だ。」

と言った者がいます。仲間から兄貴と呼ばれ

ている元気のよい若者です。

「いやいや、そんなことはないぞ。経塚の六地

蔵に小便をかけたやつのおちんちんがはれたというからな。」

「ばかばかしい。そんなことがあるものか。よ

し、それじゃ、おれが試してやろう。」

若者たちは、みんなで経塚にやってきました。



よる ひとり  
夜、一人では  
とても来ら  
れるところ  
ではありま  
せんが、みん  
ないっしょ  
ですから  
平気です。  
そして、「た

いねにも首まで折って見せました。驚いた仲間  
の者たちは、

「たたりがなければよいが。」

と心配しながら、みんな黙り込んでそそくさと

家へ帰りました。

あくる日の晩、また、いつものところに若者

が集まりましたが、兄貴の姿が見えないことに

気づきました。

「さては、たたりにあって……………」

みんな、同じことを考えました。そこで、若者

の一人が、兄貴の家へ行ってみますと、兄貴は、

たりなんか無い。」と主張した、兄貴と呼ばれ  
る若者が、六地藏に小便をかけた上に、ごて

青い顔をして寝ていました。

「いったい、どうしたんだや。」

「それがさ、ゆんべ夜中に六地藏がやってきて、

ふとんの上からおれを押さえつけやがるんだ。

重くて重くて、一睡もできなんだ。きようは

一日、田打ちも休んで寝とったのだ。」

兄貴は、いつもの元気もなく、なさけない声で

言いました。

気の毒に思った仲間が二・三人、その晚いつ

しよに泊まってやりましたが、何事も起こりま

せんでした。それで、もういいだろうと、次の晚、

一人で寝ていると、また六地藏に馬乗りされ、

一晩中うなされつづけました。

「やっぱり、六地藏のたたりなんだ。」

あのとき、強がりと言って六地藏の首を折った

ことを後悔しながら、兄貴は、お寺の和尚さん

にたのんで、六地藏におわびのお経をあげても

らいました。するとその晚は何事もなかったの

で、ほっと安心してると、また次の日の晚、

六地藏が現れました。

こうして、さんざん苦しめられて病人のよう

になつてしまった兄貴は、よその土地へ逃げて

行きましたが、どこまでも六地藏は追っかけて  
きました。

ついに兄貴は、白装束をまとって、全国の  
六地藏を回わり、罪をわびて歩くようになった  
といいます。

それからいぶん後になって、ばちの当た  
った若者のことも忘れられたころ、首の折れた  
六地藏の前に、村の人が新しい六地藏を建てま  
した。すると、今度は、建てた人の家庭に不幸  
が続きました。

「六地藏のたたりがちがない。」

「古い六地藏の前に建てたのが悪かったのかも  
知れん。」

そこで、さつそく新しく建てた六地藏を、前  
からあった六地藏の後ろに移しますと、不幸な  
出来事は、ぴつたりと止まったということです。